第３章　四日市市の歴史文化の特徴

１．地区ごとの歴史文化の特徴

（１）中部地区（共同、同和、中央、港、浜田）

東海道の町並み（「四日市散策マップ東海道編」）

大入道

四日市港（末広橋梁）

①東海道四日市宿

江戸時代には、東海道五十三次の 43 番目の宿場町として栄えました。東海道の往来が活発になる近世以前より、市場町としてにぎわっており、宿場町となったことで、より商業のまちとして発展しました。町並みは、東海道に沿った北町・南町、東海道と交わる浜往還に沿った立町・中町・浜町を中心に形成されました。また、幕府の直轄地として陣屋が置かれ、絵図によると、周囲に濠をめぐらした防御的な施設でした。平成 11 年の発掘調査により、木の橋脚や護岸施設とともに濠跡が見つかり、多量の陶磁器や木製品などが出土しました。

陣屋の近くには、本能寺の変の後に、大坂の堺から三河に戻る際に徳川家康が立ち寄ったと伝承がある思案橋があります。

②近代産業と四日市港

四日市港は昔から天然の良港で、15 世紀ごろには湊としての姿が形作られたといわれています。幕末から明治初期にかけて伊勢湾内最大の商業港となりました。しかし、安政の大地震による被害などで、船の入港が困難となってきました。そこで、この状況を憂いた稲葉三右衛門が明治６（1873）年に改修事業を始め、10 年以上の歳月を経て、近代港湾の基礎を築きました。その後、度重なる災害に遭いながらも港としては発展を続け、明治 26（1893）年から三重県が大規模な修築事業を行い、このとき築かれたものが今に残る潮吹き防波堤などの四日市旧港港湾施設です。そうして明治 32（1899）年には国から開港場の指定を受け、国際貿易港となります。

四日市港の近代化は近代産業を後押しします。繊維産業の発展に伴い綿花、羊毛の代表的な輸入港となります。戦後には特定重要港湾に指定され、海岸部への石油化学コンビナートを始めとした工業都市としての発展にも寄与することになります。

③室町時代からの市

承元元（1207）年、鴨長明の伊勢記に「浜村」という地名が出てきます。これが後の四日市を指すものといわれています。文明２（1470）年には浜田に築城した田原美作守忠秀により、領内の殖産振興をはかるために市場を形成したとされます。弘治・永禄年間（1555～1570）のころになると市場も整い、四日市と称して毎月４の付く日の定期市が始まり、これが「四日市」の名の起こりといわれています。

市内では、現在も多くの定期市が行われており、なかでも三滝川慈善橋市場は最も古い歴史を持ち、大正 11（1922）年から続いています。

④赤堀三家

応永年間（1394～1428）、田原孫太郎景信が上野国赤堀庄から移り赤堀城を築き、一帯を赤堀一族が治めたといわれています。景信の三男である忠秀が、現在の鵜の森公園に浜田城を築き、浜田城の西にあった東海道を東に移し、また東海道と港が交わる大道を開いて市場を形成し、城下に現在に続く市街地としての基盤をつくったとされます。地区内にある建福寺は室町時代前期に開基された寺院で、赤堀一族の菩提寺といわれています。

⑤祭礼・行事の民俗文化

諏訪神社の例大祭である四日市祭は、江戸時代の初期から伝わるといわれています。“東海の三大祭り”とまで称されるにぎやかな祭りでした。

四日市空襲により「大山車」や「遂（ネリ）」は焼失しますが、昭和 39（1964）年より市民の祭典として「大四日市まつり」が始まり、大入道、鯨船、大名行列など市内の代表的な民俗行事が行われています。

一方、伝統的な祭礼を復活させようと、平成９（1997）年より「秋の四日市祭」が開催され、舞獅子や「遂（ネリ）」が奉納されるようになり、平成 14（2002）年の鎮座 800 年記念の年からは、例大祭を 10 月第１日曜日として行われています。

⑥菰野道の起点

菰野道は、四日市宿の中心である札の辻から、菰野町菰野へつづく街道です。札の辻から港をつなぐのは浜往還であり、立町・中町・浜町と町並みがつながっています。菰野城下町と四日市宿の往来は頻繁で、藩主の参勤交代も菰野道を通って四日市に至り、東海道に合流して江戸へ向かったといわれています。旧街道沿いには、西町延命地蔵などかつての街道の姿を感じさせる文化財が残っています。

⑦四日市港へつながる鉄道の発達

各地から四日市港への産業関連輸送を主目的として、鉄道網が整備されていきます。本市における近代産業の発祥の地である四郷と市内を結ぶために、四日市あすなろう鉄道の前身である三重軌道が大正元（1912）年に開業しました。また、藤原岳の石灰岩を原材料とし

て作られるセメントを四日市港へ輸送することを主目的に、昭和６（1931）年には三岐鉄道が開業され、現在もJR四日市駅から港への引込線が存続しています。

（２）橋北地区

萬古神社（橋北地区 HP より）

ＪＲ関西本線の三滝川橋脚

①四日市萬古焼の産地

昭和 54（1979）年に国の伝統的工芸品として指定された「四日市萬古焼」の主産地です。江戸時代に山中忠左衛門が技法を導入し長年の研究を経て、「四日市萬古」を誕生させました。四日市港や鉄道の整備に伴い、急速に地場産業としての基盤が築かれました。

昭和 38（1963）年からは萬古神社周辺で、毎年５月に「四日市萬古まつり」が開催され、たくさんの人が集まります。

②東海道および街道沿いの集落形成

江戸時代に東海道が整備されると、街道筋に人家が建ち並び、また四日市宿の助郷として人馬の提供も行われるようになりました。街道沿いに創業した天保年間（1830～1844）からの店である「文蔵の餅屋」や、文政年間（1818～1829）からの嶋小の団子は現在も続いています。

③工場地帯（コンビナート）

四郷地区の実業家伊藤傳七（10 世）は、明治 19（1886）年に三重紡績株式会社を創設し、明治 21（1888）年には浜町に本社・工場がほぼ完工、現在の三滝公園では大正 13（1938）年に新浜地内の東洋紡績ができ、第二工場も操業を開始しました。昭和に入ると軍需産業の進展に伴い、昭和 18（1943）年、浦賀ドッグの造船所設立を目指し、午起地先の海岸埋め立てが始まりました（敗戦により中止）。

昭和 30 年代には午起海面で大規模な埋め立てが行われ、昭和 38（1963）年に第２コンビナートが本格的に稼働しました。現在は、工場夜景など本市の観光資源として発信されています。

④鉄道

地区内には JR 関西本線と近鉄名古屋線が通ります。近鉄名古屋線の沿線には製陶業者の工場や卸問屋が建ち並んでいます。ＪＲ関西本線は、1890（明治 23）年、関西鉄道が拓殖駅

から延伸した終着駅として開業し、昭和6（1931）年に午起駅を設け、午起海岸の海水浴客のために夏季のみ仮停車場を設けました。また三滝川橋脚は、往時のレンガ造りが残っています。

（３）海蔵地区

海蔵川桜並木（海蔵地区 HP より）

御厨飽良河神社の獅子頭
（まちづくり構想より）

イヌナシ自生地
（まちづくり構想より）

①四日市萬古焼のはじまり

国の伝統的工芸品として指定されている「四日市萬古焼」は、幕末、末永村の大地主であった山中忠左衛門が、東阿倉川の唯福寺の海蔵庵窯から手ほどきを受けるなど 20 年の研究を重ね、地場産業として量産できる陶法を確立しました。そして村人に技術指導を行い、陶工を育成しました。これが、四日市萬古焼のはじまりです。現在も萬古焼の主産地となっています。

②東海地方固有の植物

東海地方の固有種であり、ナシの原種と言われるイヌナシ（マメナシ）の自生地があります。また、イヌナシと栽培ナシの中間であるアイナシも自生しており、この種が発見された原木として、ともに国指定天然記念物となっています。

ため池周辺や湧き水のあるやや湿った場所で見られますが、耕地整理や宅地開発で生育地が減っており、学術的にも価値の高いものです。

③川と桜並木

地区には、海蔵川、三滝川などが流れています。海蔵川では、昭和 34（1959）年頃の改修工事により堤防に桜が植樹され、以来地区の誇りとして実行委員会により拡充、保全が行われてきました。現在、海蔵川左岸の末広橋～新開橋までの約 1.5 ㎞に約 500 本のソメイヨシノが並木をつくり、本市の桜の名所となって、多くの花見客でにぎわいます。

④獅子舞などの祭礼行事

かつて旧東阿倉川村は伊勢大神楽の発祥地の一つであり、獅子舞が昭和 20 年代半ばまで存続していました。令和２年には 60 年ぶりに海蔵神社で復活しました。また、御厨飽良河（みくりやあくらがわ）神社には、江戸時代末期の獅子頭が残されています。現在も西阿倉川獅子舞保存会が獅子舞を保存・継承しています。

⑤東海道

地区の東部には東海道が通っています。江戸日本橋を拠点に一里塚が設けられ、海蔵川左

岸に三ツ谷の一里塚跡の石碑が建てられています。また、明治 18（1885）年 2 月、旧桑名郡多度町（現桑名市）の多度神社に勧請して建立された多度神社が街道に面して鎮座し地域の人々より厚い信仰を受けてきたといわれています。

（４）羽津地区

志氐神社古墳

森家住宅

大膳寺跡

①東海道

東海道に沿って、集落が形成され発展してきました。現在も常夜燈や一本松（かわらづの松）、道標や大規模な町屋の趣を伝える民家もあり、街道の歴史を感じることができます。

②古代史の舞台

７世紀の壬申の乱のとき、大海人皇子が朝明郡に立ち寄った際に、天照大神を遥拝したとの伝承から天武天皇神宮遥拝所碑が糖塚山（額突山）の山頂にあります。

奈良時代の聖武天皇の東国行幸にお供した丹比屋主真人（たじひのやぬしまひと）が詠んだとされる、「後れにしひとを思はく思泥の崎木綿取り垂でて幸くとぞ思う」が『万葉集 巻六』に収められ、その歌碑が志氐神社にあります。

③古墳文化

羽津地区では、弥生時代から丘陵の東端に集落が点在していました。志氐神社境内にある志氐神社古墳は、市内で唯一確認されている前方後円墳で、古墳時代の前期（４世紀末）に築造されたものと考えられます。当時、四日市北部に勢力を誇っていた豪族が存在していたことを窺うことができます。また、糖塚山には古墳群が築かれ、消滅した死人谷横穴墓群では金銅製の環頭大刀柄頭が出土し、現在東京国立博物館に所蔵されています。

④仏教文化

古代、朝明郡の額田郷に属し、仏教文化が地域に広がり寺院が建立されました。大膳寺跡は、10 世紀に慈恵大師の弟子である覚鎮が建立したとされています。16 代円爾が、本願寺蓮如上人の教化を受け浄土真宗に転じ、大膳寺を出て浄恩寺を起こしたと伝えられます。

光明寺は、弘仁年間（810～824 年）に空海が諸国を巡回した際に始まったといわれますが、享禄年間（1528～1531 年）に、羽津城主赤堀左京大夫盛義が出家して光明寺に入り、現在地に寺を移したといわれています。また、正法寺は、応永年間（1394～1427 年）に羽津城主赤堀右エ門大夫盛宗が開基となり開山したといわれます。

⑤赤堀三家

応永年間（1394～1428 年）、田原孫太郎景信が上野国（今の群馬県）赤堀庄から移って赤堀城を築き、一帯を赤堀一族が治めたといわれています。景信の長男である盛宗が羽津城を築城し、以降、６代にわたって支配が続いたとされます。元亀３（1572）年に、織田信長の北勢侵攻でその軍門に下ったとされます。羽津城跡は、近鉄名古屋線により改変されていますが、土塁が名残をとどめ、市指定史跡となり石碑が建っています。

⑥工場地帯（コンビナート）

昭和 40 年代以降、公害被害がありましたが、出島方式によって霞ヶ浦地区の埋め立てが行われ、コンビナートが形成されました。現在は環境が改善され、工場夜景など本市の観光資源として発信されています。

（５）富田地区

富田一本松

鳥出神社の鯨船行事

富田の一里塚跡

①東海道（立場）

富田は、江戸時代に桑名藩領となり、東海道の桑名宿と四日市宿の間の「立場」と呼ばれていました。一里塚が建てられ、常夜燈が置かれました。人々の往来で大変なにぎわいがあり、茶店が軒を並べていました。松かさで焼いた焼き蛤を売る光景が見られ、当時の様子が浮世絵などに描かれています。また、俳人宝井其角が尾張屋の店先で詠んだ「蛤の焼かれて鳴くやほととぎす」という句があり、句碑が富田浜に建てられています。

②中世の城館（富田城と茂福城）

「朝明郡富田之館」を拠点としたとされる伊勢平氏の一族、進士三郎基度は、元久元（1204）年、三日平氏の乱の後、京都の守護平賀朝雅に滅ぼされました。

近世の伝承では、室町時代に南部氏が信濃国から移り、富田城を築き、織田信長の北勢侵攻で滅ぼされるまでこの地を治めたとされます。

また、貞冬という人物が越前朝倉氏のもとにいましたが、応永年間（1394～1428）の乱を避けて当地に移り、地名に因んで茂福氏を名乗ったとされます。朝明川上流の保々西城を構えた朝倉氏と同族とされます。『伊勢軍記』には、永禄３（1560）年に羽津城主の田原氏と朝倉氏とが激しく争う茂福合戦など続きました。永禄 10（1567）年には、城主朝倉盈豊は、長島で滝川一益に謀殺され、その際、主人の首を家臣が保々に葬ったとされます。この戦いで茂福城は落城したとあります。富田の一本松は、滝川軍が海路から上陸する目標にしたといわれています。

③多彩な祭礼行事（鯨船行事ほか）

鯨船行事、石取祭、虫送り、どんど焼き、亥の子まつり、日待ち神事など、長い歴史を刻む伝統行事が大切に引き継がれています。五穀豊穣や豊漁を祈る行事です。

鳥出神社の鯨船行事は、ユネスコ無形文化遺産に登録されています。鳥出神社には御座船模型があり、これが奉納された天明元年（1781）頃に鯨船行事が始まったという伝承もあります。

④漁師町と地場産業

近世より海岸部では漁師町が形成されました。現在も海岸に向かって伸びる町割、未だ多く残る弁柄格子と立てかけられた縁台など、当時の町並みを感じることができます。また、漁業を支える魚網製造が江戸末期から発達し、地域の重要な産業となっています。アミカン（旧網勘製網）本社事務所は国登録有形文化財となっています。

地区が発展したことで祭礼にかかせない提灯製造も発達し、明治５（1872）年には現在とほぼ同じ形で製造が行われており、「四日市の提灯」として三重県の伝統工芸品に指定されています。石取祭り山車に飾られたり、鯨船行事の際には、東富田町の各辻ごとにテーマ性を持った鮮やかな提灯 7 個を取り付けた提灯台 14 基が設置されて祭りに彩りを添えています。

⑤桜並木（景勝地）

十四川沿いの桜並木は、市内の桜の名所となっています。堤防に沿って東西に約 1.2 ㎞、ソメイヨシノが 600 本余り並んでいます。大正 12（1923）年、網勘製網株式会社が創立を記念して植樹したのが始まりです。地域の人たちが花壇を整備するなど、住民の憩いの場となっています。

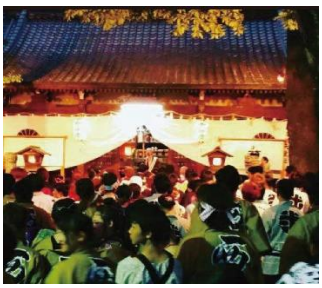
⑥鉄道

市北部の中心的なまち富田は、JR 関西本線、近鉄名古屋線、三岐鉄道三岐線が通る交通の要衝で、JR 富田駅、近鉄富田駅は地域の核となっています。三岐鉄道は、いなべ市藤原町の工場から四日市港にセメントを運ぶ目的で昭和６（1931）年に開通し、今も現役です。昭和 27（1952）年には、高砂町にあった本社が、貨物列車が乗り入れる JR 富田駅横に移されています。

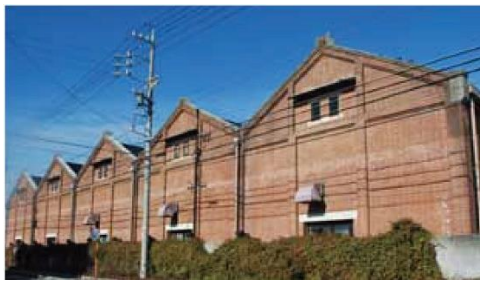
⑦記紀神話の舞台

富田の地名は、古事記でヤマトタケルが大きな白鳥と化して飛び去ったという伝説より、「とんだ」が変換されたと言われています。また、鳥出神社は、「鳥が出る」というもので、このヤマトタケルの伝説に由来するといわれています。

（６）富洲原地区



松原石取祭
（富洲原の魅力再発見マップより）



旧東洋紡績富田工場原綿倉庫
（富洲原の魅力再発見マップより）

伊勢湾台風慰霊碑
（富洲原の魅力再発見マップより）

①近代化の先駆け

大正３（1914）年に伊藤傳七創設の三重紡績と大阪紡績が合併して東洋紡績株式会社が誕生すると、大正６（1917）年より東洋紡績富田工場の操業が開始されました。塩水が混じり農業には向かない土地でしたが、海上交通が便利で工場立地に適しており、昭和初期まで原綿倉庫や事務所、社宅などが建設されました。地区の人口も増え、富洲原地区は発展しました。

水道が早くに敷かれるなど本市の近代化の先駆けとなった地区であり、近代建築が残ります。富洲原小学校の講堂は、地元の実業家である平田佐次郎や伊藤平治郎、及び町民の寄付も受け、昭和 11（1936）年に建設されたもので、現在も当時の姿を残したまま利用されています。また、旧東洋紡績富田工場原綿倉庫は、工場の建物として唯一残っているもので、国登録有形文化財となっています。

②古代史の舞台

古代においては、朝明郡豊田郷に属していたと伝えられます。

聖武天皇が東国行幸の際に詠んだとされる、「妹に恋い吾がの松原見渡せば潮干の潟に鶴鳴き渡る」が『万葉集』に収められ、この松原を聖武天皇社付近とする伝承があり、町名との関連がうかがわれます。現在の聖武天皇社は、安貞元（1227）年に伝承によりこの地に創建されたと伝えられます。

③漁師町の歴史と関連産業

近世より富田一色は漁師町として栄えてきました。現在も町割などに当時の町並みを感じることができます。水産物加工も盛んに行われてきました。

また、漁業を支える魚網製造が江戸末期から発達し、平田商店（のちの平田紡績）など地域の重要な産業となりました。伊藤平治郎は、漁業だけでは不安定と考え、伊勢タオルの製造も起こしました。

④暮らしと祭礼行事

松原、天カ須賀の石取祭、富田一色のけんか祭り、どんど、がに祭りなど、長い歴史を刻む伝統行事が大切に引き継がれています。

石取祭は、聖武天皇の行幸に由来するとされる賑やかなお祭りです。松原と天カ須賀各５台の祭車が鉦・太鼓を打ち鳴らし町内を練り回ります。

けんか祭りは、鎌倉時代、非業の死を遂げた佐原豊前守の怨霊を鎮めるため、満月上人が民衆とともに鉦を叩き練行したことに由来します。大鉦を鳴らし飛鳥神社に入ろうとする宮守と、太鼓を叩き防ごうとする氏子たちが激しくもみ合う勇壮なお祭りです。

⑤八風道

八風道は富州原町の海運橋から鈴鹿山脈を越え、近江（滋賀）へとつながる街道です。古くは、保内商人を中心とする四本商人（東近江の商人）がやって来る道として栄え、江戸時代以降は、富田一色から魚を近江に売りに行くために使ったといわれています。現在も街道沿いには道標などが残っています。

地区では廻船業に従事する人も多く、大矢知を中心とした忍藩から江戸方面へ運ぶ年貢米が富田一色の湊から積み出されました。

⑥伊勢湾台風被災

昭和 34（1959）年の伊勢湾台風は市内で死者 115 名もの甚大な被害を出しました。特に富洲原・富田の沿岸部では多くの家屋が全壊・流失しました。市内で最も被害の多かった富田一色の海浜緑地に、殉難者の冥福を祈るため、昭和 41（1966）年に慰霊碑が建立され、毎年、被災した 9 月 26 日に殉難者慰霊献花式が催されています。

（７）大矢知地区

天武天皇迹太川御遥拝所跡

久留倍官衙遺跡公園

大矢知素麺（「四日市市の地場産業」）

①忍藩の代官所

江戸幕府の成立により桑名藩となりましたが、桑名藩主松平氏が武蔵国忍への転封を命じられたのに伴い忍藩の領地となり、八風道の要地であった大矢知村に陣屋が置かれました。現在の市立大矢知興譲小学校の敷地が忍藩陣屋跡であり、松並木が往時を偲ばせます。陣屋の一角には、陣屋武士の子弟が学んだ藩校、興譲館があり、校名の由来となりました。

②古代朝明郡の郡衙

古代には朝明郡に属し、朝明郡の郡衙が置かれました（久留倍官衙遺跡）。『日本書記』によると、天武元（672）年、壬申の乱の際に大海人皇子が朝明郡の迹太川で天照大神を遙拝し、その後朝明郡家に入ったとされます。また、『続日本紀』や『万葉集』によると、天平12（740）年、聖武天皇が東国行幸の際に朝明頓宮に２泊したとされるなど、古代史の歴史の舞台となり、天武天皇迹太川御遥拝所跡（県指定史跡）など関連する史跡が地区の中に点在しています。

③中世の城館

文中元（1372）年、垂坂山に布陣した南朝側の北畠顕泰と北朝側の仁木義長・南部頼勝（大矢知城主）が争った垂坂山の合戦が起こりました。その後、北勢四十八家が割拠したといわれ、勢力争いをするなか、大矢知地区には、大矢知氏による大矢知城、蒔田氏による蒔田城が築かれたとされます。

④東海道と八風道

東海道と八風道との交差辻が西富田にあり、昔から交通の要衝となっていました。東海道沿いには寺社が多く存在し、朝明川を渡る橋のたもとには常夜燈が建てられています。

八風道は、富洲原地区の海運橋から鈴鹿山脈を越え、滋賀へとつながる街道です。中世には、保内商人を中心とする四本商人（東近江の商人）がやって来る道として栄え、江戸時代以降は、富田一色から魚を近江に売りに行くために使ったといわれています。現在も街道沿いには、昔ながらの店舗や町屋、道標などが残っています。

⑤仏教文化

垂坂山観音寺は、平安時代の延長６（928）年に朝明郡司である船木良見の帰依寄進を受け、元三大師（慈恵大師・良源）によって建立されたのが始まりと伝えられます。伊勢天台別院として栄え、最盛期には24坊を擁する寺でした。しかし、天正３（1575）年に織田信長の兵火によって、諸堂はことごとく炎上したと伝えられています。元禄４（1691）年、桑名藩主松平定重の命により再興され、現在、慈恵大師坐像（国指定重要文化財）をはじめ多くの文化財を所有します。

⑥江戸時代からの地場産業

地区を流れる朝明川の伏流水を利用した地場産業として、江戸時代より酒造りなどの醸造業が盛んでした。

鈴鹿山脈から吹き降ろす「鈴鹿おろし」によって麺を乾燥させるのに適した場所であることから、大矢知手延素麺は、江戸時代末期から農閑期の農家の副業として生産されてきました。明治初期には灘式の素麺づくりが取り入れられ、本格的な素麺作りが始まったといわれ、地場産業として大きく発展しました。

（８）八郷地区

伊坂ダム（四日市市文化まちづくり財団 HP より）

伊坂銅鐸

旧平田家住宅

①先史時代から古代の文化

縄文時代中期から人々の暮らしがありました。弥生時代には、菟上遺跡や西ヶ広遺跡、金塚遺跡に大規模な集落が見られます。伊坂銅鐸は、伊坂町の重地山から文久 2（1862）年に発見された弥生時代中期の扁平鈕式六区袈裟襷紋銅鐸で県指定有形文化財となっています。

また、朝明川沿いには浄ヶ坊古墳群のほか、石塚古墳、横穴式石室が現存する八幡古墳、埴輪が出土した松山古墳などの古墳が多く分布しています。金環が出土した金塚横穴墓など、墳丘を持たない横穴墓が多いのも特徴です。

古代においては朝明郡に属しており、郡の中心的な遺跡が朝明川北岸に分布しています。菟上遺跡では、飛鳥時代の掘立柱建物群がみつかっています。西ヶ広遺跡では奈良時代の掘立柱建物群が整然と建てられ、朝明郡衙関連遺跡と考えられています。

②中世の城館

春日部氏による萱生城、横瀬氏による広永城、伊坂氏により伊坂城が築かれ、この地を支配したとされます。城館は朝明川に沿った高台に位置し、北勢四十八家による抗争の中、堀や土塁を造り、城を守ったといわれます。しかし、織田信長の北伊勢侵攻により滅ぼされたと伝えられています。伊坂城跡では発掘調査が行われ、櫓門の礎石が見つかりました。現在、礎石は伊坂ダムに移設され、屋外展示されています。

③農村の暮らしの文化

農業中心の地区であり、亥の子など、五穀豊穣を願う行事があります。穂積神社では、こども相撲が行われていました。また、旧平田家住宅は江戸末期から庄屋を務め、その後三重郡議会議員や八郷村村長を務めた旧家で、明治 3（1870）年に建てられた大型の主屋があります。国登録有形文化財となっています。

④八風道

八風道は海運橋から鈴鹿山脈を越え、滋賀へとつながる街道です。中世には、保内商人を中心とする四本商人（東近江の商人）がやって来る道として栄え、江戸時代以降は、富田一色から魚を近江に売りに行くために使ったといわれています。街道沿いには、現在も道標な

どが残っています。

⑤ダムのある景観

昭和 41（1966）年完成の伊坂ダム、昭和 51（1976）年完成の山村ダムは、県の北中勢地域へ工業用水を供給するための貯水池として三重県企業庁が建設したものです。両ダムの恵まれた自然環境を活かして、八郷サイクリングコースが整備されています。周辺の山々の緑と湖水、ダムのダイナミックな構造物が四季折々の美しい景観をつくり出しています。

（９）下野地区

経塚公園

広古墳群（下野マップより）

桜神社（下野地区 HP より）

①先史時代から古代の文化

縄文時代から人々の暮らしがあり、中野山遺跡では縄文時代早期から後期の煙道付炉穴や集積炉といった調理のための施設が多数見つかっています。また、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物も見つかり、長い間この地に人々住んでいたことが分かります。

古墳時代には、居林古墳群、持光寺山古墳群、鶯谷古墳群、西ノ山古墳、広古墳群など多くの古墳が造られます。とくに広古墳群は、この地域では最大級の方墳を主とするもので、地域の歴史上重要であり、県指定史跡になっています。

古代においては朝明郡に属しており、関連する古代の遺跡が多く分布しています。北山Ａ遺跡の出土品からは、製鉄を行っていたことが推測されます。また、中野山遺跡では、計画的に配置された掘立柱建物が見つかっています。

②八風道

八風道は富州原町の海運橋から鈴鹿山脈を越え、近江（滋賀）へとつながる街道です。古くは、保内商人を中心とする四本商人（東近江の商人）がやって来る道として栄え、江戸時代以降は、富田一色から魚を近江に売りに行くために使ったといわれています。現在も街道沿いには道標などが残っています。

③経塚公園と三賢人

経塚公園にある経塚は、かつてあったとされる西徳寺が織田信長の兵火で焼失した際、寺の僧侶が保存のために大般若経を埋めたとの伝承があります。今では、その目印であったヒノキが大きく成長しています。経塚公園は市指定史跡となっています。

その経塚公園には、地元で三賢人と呼ばれる先人たちの顕彰碑が建てられ、敬わられています。三賢人とは、文久３（1863）年から明治８（1875）年まで安乗寺境内に寺子屋を開き子弟の教育にあたった藤井昇善、明治時代の政治家で下野村初代村長であり学校教育振興に熱心だった下田亨三、儒学者であり忍藩の藩校興譲堂の教頭で、半学舎という私塾を開い

た大賀賢励です。下野地区で教育に尽力し、数多くの人材を輩出し、地区の発展に大きく寄与しました。

④農村の暮らしの文化

昔から農業を中心とした地区であり、子ども相撲やどんとなど、子どもが中心となる行事が行われています。経塚公園で行われるこども角力（相撲）は、現在でも開催されています。

⑤四日市梨の産地

山城町では、大正時代に始まった特産物として有名な梨の生産が、現在でも盛んです。

（10）保々地区

若宮１号墳（殖栗連墓）

市場町の獅子舞

神崎の常夜燈

①先史時代から古代の文化

縄文時代から人々の暮らしがあり、小牧南遺跡では縄文時代中期の掘立柱建物や竪穴住居のほか、古墳時代から飛鳥時代の竪穴住居が見つかっています。丸岡遺跡は縄文時代後期から鎌倉時代に至る複合遺跡です。また、筆ヶ崎西遺跡では古代の大規模な集落跡が見つかり、この地に人々の暮らしが続いていたことがわかります。

古墳時代には筆ヶ崎古墳群、公事出古墳群、門ノ上古墳群、道具林古墳、若宮古墳群など多くの古墳が造られます。筆ヶ崎古墳群では、耳環やかんざしが出土しています。また若宮１号墳は、朝明郡を治めていた殖栗連（えぐりのむらじ）の墓であると、地元で伝承されています。明治 15（1882）年に発掘が行われ、横穴式石室であることが判明し、室内から金環・壺・須恵器杯・鉄鏃などが出土しました。これら出土品は、殖栗神社（西村町）の宝物として保存されています。現地には、殖栗連の墓として碑が建てられています。

②中世の寺院

大樹寺は、宝徳年間（1449～1451 年）に保々城主朝倉氏が開基、真源大沢禅師を開山として創立したとされます。県指定有形文化財「真源大沢禅師像」、「禅源大済禅師像」、「大般若経 120 帖」、「仏涅槃図」、市指定有形文化財「広山和尚画像」など、多くの文化財があります（現在、四日市市立博物館に寄託）。

また、朝倉城主の菩提寺とされる浄蓮寺のほか、行円寺、円覚寺、少林寺など多くの寺院があります。

③中世の城館

室町幕府が北伊勢地域に配置した奉公衆のうち、この一帯は十ヶ所人数に名が見られる朝倉氏により保々西城、市場城、中野城が築かれました。その後、織田信長の北伊勢侵攻によりその軍門に下ったとみられます。現在も、保々西城跡や市場城跡には、当時の井戸跡・空堀・土塁等が良好に残っています。

④農村の暮らしの文化

江戸時代、天春家は朝明・三重から員弁郡にわたる地域（桑名藩、忍藩、幕府領）の庄屋・

大庄屋役を務め、桑名藩の代官に任用されたこともありました。その天春家が所蔵してきた文禄３（1594）年の太閤検地をはじめとする土地台帳や、貢租、宗門改等の古文書は、当時を知るうえで貴重な資料であり、市指定有形文化財となっています。

また、市場町獅子舞は明治初期に山之一色村（現山之一色町）から習ったと伝えられ、久久志弥神社（鈴鹿市）に伝わる箕田流です。起源は、室町時代に保々西城主朝倉備前守兵部太夫と千種城主の勢力争いの中、戦いのたびに神社仏閣に武士が乱入することから、その罰を恐れた朝倉備前守が朝明川の南にあった菩提寺大樹寺と殖栗神社を川北に移し、毎年９月９日に武運長久を祈り、大般若経 600 巻の転読と五穀豊穣のため獅子舞を奉納したことに始まると伝えます。現在、10 月の殖栗神社の祭礼に奉納され、市指定無形民俗文化財となっています。

⑤八風道

八風道は富州原町の海運橋から鈴鹿山脈を越え、近江（滋賀）へとつながる街道です。中世には、保内商人を中心とする四本商人（東近江の商人）がやって来る道として栄え、江戸時代以降は、富田一色から魚を近江に売りに行くために使ったといわれています。現在も街道沿いには道標などが残っています。

神崎（現在の小牧町南）の常夜燈は、八風道・四日市道・千草道・員弁道の五差路に安政７（1860）年に建立されたものです。当時、美濃、関ヶ原、いなべの人たちが伊勢神宮に参拝するためにここを通って四日市から東海道へ出て、この周辺は旅人でにぎわっていたといわれています。

（11）三重地区

御池沼沢植物群落

御館獅子舞

三重郷土資料館（旧三重村役場書庫）

①今に伝わる地名の由来　※ヤマトタケル関係の記載は内部地区と要調整

地元に伝わるいわれによると、『古事記』に記されたヤマトタケルが東国平定の帰途、病気になってこの地を通られた時に、今の西坂部町御館にある足洗池で足を洗われて「吾が足三重に勾りて甚だしく疲れたり」と言われたのが、三重の名の起こりだといわれています。なお、地名である足洗とは、葦に覆われたところという意味からきたともいわれています。

また、壬申の乱で、大海人皇子がこの地を通られた時、ここに兵を休めて一夜を明かされたことから、御館の名が起こったという説がいわれています。

②先史時代から古代の文化

地区の中央を海蔵川が流れ、肥沃な土壌と豊富な水に恵まれた田園地帯として発達しており、数多くの遺跡が発見されています。海岸線を東に見下ろす生桑丘陵の北端に、弥生時代前期の集落跡である大谷遺跡があります。そこからやや上流には、古墳時代後期から平安時代中期にかけての集落跡である落河原遺跡、飛鳥・奈良時代の集落跡を残す貝野遺跡があり、多くの人々がこの地に住んでいたことがわかります。また、古墳時代には御池古墳群が造られ、発掘調査で装飾須恵器・特殊須恵器（市指定有形文化財）などの特徴的な副葬品が出土したことから、有力者が存在したことをうかがわせます。

③暮らしと祭礼行事

御館の獅子舞は今から 1300 年程前、天武天皇が西坂部町の江田神社に獅子頭を勅納したのが始まりという伝説があります。山本流の獅子舞です。生桑長松神社の鏡餅行事は、特殊な形状の鏡餅を神社に奉納するという特徴のある正月行事です。ともに市指定無形民俗文化財です。

獅子舞は、箕田流が小杉神社、刑部神社、遠保神社でも奉納され、また、みくわまつりなどの祭礼行事もあり、伝統が引き継がれています。

④近代の公共建築物

大正５（1916）年に建築された旧三重村役場書庫は、国登録有形文化財となっており、現

在、三重郷土資料館として地元の方々により活用されています。

大正８（1919）年に設立された四日市給水株式会社を、当時はほとんどの家庭が井戸でしたが衛生思想の普及から、昭和３年に四日市市が買い受け、昭和７年に生桑水源地を完成させました。現在も水道水を配水する施設で、災害時には応急配水拠点になります。

⑤特色ある自然環境（御池沼沢植物群落）

御池沼沢植物群落は、第三紀層からなる台地の東端の裾の湧水によって生じた南北約400m、東西約 800m の湿原および沼沢地でした。現在は、中央部が水田となり、東部と西部に分かれています。レッドデータブックに掲載されている絶滅危惧種をはじめとする希少な湿地の植物が生育しており、国指定天然記念物になっています。現在、地域の方々や環境保全ボランティアの協力により、生育環境を守る活動が行われています。

（12）県地区

グリーンパーク岡山

竹谷川（地区まちづくり構想より）

①農村の暮らしの文化、祭礼

伝説・むかしばなし、報恩講、郷土料理などが大切に受け継がれています。

②学者、俳人を生んだ地

江戸期の儒学者・漢詩人、大正・昭和の俳人・歌人を数多く輩出しています。久保三水は、江戸後期の儒学・漢学者で、その子蘭所とともに私塾「修講館」を開いて子弟を教導しました。久保三水・蘭所墓碑が建立され、住民から敬われています。

③人の往来　道標 22 基

江戸時代には津藩、忍藩、菰野藩、吹上藩、一宮藩などの分割領有となり、多くの人の往来がありました。現在、地区内には、22 基にのぼる道標や、常夜燈が残っています。

④景勝地　桜並木と蛍

地区内には３つの河川（海蔵川、竹谷川、三滝川）に潤された豊かな田園が広がっており、豊かな自然が色濃く残っています。竹谷川では、春には桜が咲き誇り、夏には蛍が飛び交い、近年では昆虫・小動物・鳥類が集まるようになるなど、四季を通じて自然を感じることができます。

⑤古代の遺跡　須恵器、瓦生産

独立した丘陵である岡山には、現在、住民の憩いの場として親しまれている市民緑地「グリーンパーク岡山」があり、古代の窯跡７基が残る岡山古窯跡群があります。古墳時代後期（６世紀代）から平安時代末期（12 世紀代）まで窯が造られました。出土品は杯・高杯などの須恵器のほか円面硯、瓦塔、瓦等を焼成していて、周辺の寺院経営と深い関連が推測されます。

⑥中世の城館　平尾城跡

北勢四十八家が割拠し、勢力争いをするなか、千種常陸介により平尾城が築かれこの地を

治めたといわれています。その後、織田信長の北伊勢侵攻によりその軍門に下ったとされます。平成５年に行われた発掘調査で、土塁や堀で区画され、掘立柱建物や井戸があった当時の城館の姿が明らかになりました。

（13）桜地区

智積養水（四日市観光協会 HP より）

椿岸神社獅子舞

シデコブシ群落

①景勝地（智積養水）

智積養水は、江戸時代に、隣町の菰野町神森にある湧水池の蟹池から智積村まで敷設された灌漑用水です。地区の水田を灌漑するとともに、野菜を洗うなど生活用水としても利用されていました。昭和 60（1985）年に環境庁選定の名水百選に選ばれるほどのきれいな水をたたえています。

蟹池から引水する途中、金渓川の下を通すために、三十三間筒という地下の導水路が作られました。

②特色ある自然環境　東海地方固有種の自生

シデコブシは東海地方固有の植物種で、限られた地域の低地や湿地に自生しています。桜町のシデコブシ群落は、市指定天然記念物となっています。

③古代史の舞台　市内最古の寺院遺跡

智積廃寺は、奈良時代前期に創建された四日市最古の寺院遺跡です。四天王寺式伽藍配置をもち、奈良飛鳥寺のものとつながる川原寺式軒丸瓦、重孤文軒平瓦が出土しています。672 年の壬申の乱の際、大海人皇子（後の天武天皇）を支援した功績の証として、天武政権からの援助で建立されたと考えられます。

④暮らしと祭礼行事　獅子舞

椿岸神社では、獅子舞が奉納されています。永正 6（1509）年の墨書銘がある獅子頭が継承されており、無形民俗文化財の獅子舞と有形文化財の獅子頭、どちらも市指定文化財となっています。

⑤古街道　菰野道と巡見道

菰野道は、四日市宿から菰野町菰野へつづく街道です。菰野城下と四日市宿との往来の道であり、菰野城主の参勤交代も菰野道を通って四日市に至り、東海道に合流して江戸へ向かったといわれています。

巡見道は、江戸時代に将軍の代替わりごとに諸国の政情・政道の得失などを査察するため

に派遣される幕府の役人である巡見使の通った道です。
　ともに現在も道標などが残り、往来の風景を現在に伝えます。

⑥地場産業　醸造文化と幻の製陶業
　桜地区は、肥沃な土地と豊かな水に恵まれ、米麦作を主体とした地区であり、古くからお酒の醸造も行われていました。現在も続く醸造所は、地域の歴史的景観を形成しています。
　桜焼は、江戸時代末期の弘化元（1844）年に創業されたもので、桜一色村の庄屋石川平八郎によって創始され、荘岡山金福寺の北側に窯が築造されました。近江国信楽郷長野の陶器職人を呼び寄せて起こしたといわれています。「星光山」と「貞斎」の 2 種類の銘があります。後を継ぐ者がいなかったため、桜焼はわずか 19 年、一代限りで終焉を迎えました。

花が沢山の写真への差し替えの希望がありました。

（14）川島地区

伊勢三郎首塚

シデコブシ

算額（神明神社）

①伊勢三郎義盛の首塚

三重郡出身といわれる伊勢三郎義盛は、源義経の家来で、源平合戦などに軍功をたてましたが、後に義経らとともに源頼朝に追われる身となり、文治２（1186）年京で捕えられ処刑されたといわれています。その首を家来が持ち帰り、義盛が一時居を構えた川島の地に埋めたといわれる“三郎塚”が、川島神明神社の前にあります。義盛の菩提を弔うために創建されたといわれる西福寺にある宝篋印塔の墓は、慶安４（1651）年、亀山領主石川昌勝が塚を発掘、遺骨を移してつくったものといわれています。

②特色ある自然環境　鹿化川と東海地方固有種

地区内には鹿化川が流れ、源流に近いため、自然豊かで水質もきれいです。川沿いには、鹿化川千本桜と呼ばれる桜並木があり、ソメイヨシノが５㎞にわたり植えられています。

シデコブシは東海地方固有の植物種で、限られた地域の低地や湿地に自生しています。川島町のシデコブシ群落は、県指定天然記念物となっています。また、昔から蛍も多く生息し、キジやカワセミなどの野鳥が身近にみられます。

③恵まれた気候風土と産業

恵まれた気候風土から良質の米を産出しており、水沢・小山田両地区と並んで伊勢茶の生産地ともなっています。また、南部一帯の山間部には孟宗竹が多く、たけのこの生産も盛んです。

地下水などの水が豊かで、きれいな水を利用した造り酒屋が江戸時代より多くありました。現在は１軒の造り酒屋があります。

川島神社と神明神社では盛大な祭りが行われており、神明神社には江戸時代の３面の算額が奉納され、市指定有形民俗文化財となっています。

④近代産業

明治 13（1880）年に伊藤傳七（９世）が、明治政府から払い下げを受けたイギリス製の二千錘紡績機を備えた、三重県最初の紡績所である三重紡績所を川島に設立しました。しかし、

技術と動力の不足から経営難に陥っていたところ、渋沢栄一からの援助を受け、明治 19（1886）年に三重紡績会社を設立し、本社を市内浜町に設け、三重紡績所を分工場としました。三重紡績会社は、その後、東洋紡績株式会社にまで発展します。三重紡績所は、大正 13（1924）年に火災に遭うまで存続しました。工場の基礎の一部が現在も矢合川沿いに残り、往時の面影を伝えています。

（15）神前地区

大日寺･大日如来坐像

翡翠谷（神前ふるさとマップより）

和泉式部 化粧の水（神前ふるさとマップより）

①中世寺院

大日寺、観音寺、欣浄寺など中世からの起源をもつ寺院があります。大日寺にある平安時代後期の御本尊「金剛界大日如来坐像」は丈六仏で像高 314 ㎝あり、市内最大の木彫仏で市指定有形文化財です。

②先史時代の遺跡

弥生時代の永井遺跡、上畑遺跡などがあり、住居跡や墓の跡が確認されました。永井遺跡で環状の溝が見つかった場所は、現在、永井遺跡公園となっています。出土品は、寺方町の文化財整理作業所に収蔵されています。

③自然豊かな里山

地区の北には大日山から曽井山を中心とした緑豊かな丘陵地帯があり、自然豊かな里山となっています。

④農村の暮らしと祭礼行事　五穀豊穣のお祭り

水利に恵まれ、米や麦を中心とする農村地区であり、寺方町及び高角町では、獅子舞や亥の子などが行われ五穀豊穣を祈ります。獅子舞は戦争により中断されましたが、獅子舞保存会が結成され継承されています。10 月の例祭の日には、それぞれ氏神様へ奉納しています。

⑤大切にされる伝承

地区内には、言い伝えの残る「和泉式部化粧の水」や「弁慶石」、「夜泣き石」などがあり、その言い伝えとともに、大切に引き継がれています。平安の頃、大日山に城を構えていた平氏の武将若菜十郎永貞が、観音寺に火をかけ奪い取ったものの、その霊力にたたられ寺に返したという翡翠（ひすい）の玉かんざしが、後に埋蔵されたという「翡翠谷」もあります。

（16）常磐地区

赤堀城跡石碑（地区まちづくり構想より）

百毒下し（翠松堂 HP より）

装飾須恵器　台付三連壺

①先史時代から古代の文化

弥生時代以降の遺跡が多くあります。北中寺遺跡からは６世紀前半頃の装飾須恵器　台付三連壺が出土し、市指定有形文化財となっています。連結された壺の形式の須恵器は、東海地方西部に特有であり、市の古墳時代を特色づける出土品として大変貴重です。宮の西遺跡からは、「柴田郷長右□×」と書かれた木簡や石帯が発見され、古代柴田郷の中心的集落であったとも考えられます。また、中世の遺跡である小判田遺跡からは、掘立柱建物や井戸などの遺構や茶碗などの出土品が多量に発見されています。

②中世の城館　三日平氏の乱

松本城は、鎌倉時代の初期、平家本流の滅亡後、伊勢・伊賀の平氏の残党が蜂起した三日平氏の乱で、松本三郎盛光が居城したとされる城で、鎌倉幕府に対するこれらの平氏残党の反乱は、一時、伊勢・伊賀両国を圧倒しました。しかし、元久元（1204）年４月 10 日から 12 日にかけての幕府側の追討ちによりこれら残党はあえなく敗走、松本城も落城したと伝えられます。

③赤堀三家

応永年間（1394～1428）、田原孫太郎景信が上野国赤堀庄から移って赤堀城を築き、一帯を赤堀一族が治めたといわれています。景信の二男である秀宗が赤堀城を継ぎ、羽津城主の長男盛宗、浜田城主の三男忠秀をあわせて赤堀三家と呼ばれ、勢力をのばしたとされます。赤堀城は、四日市地域では数カ所しかない低地にある平城でした。道路工事に伴う発掘調査が数回行われ、城の一部が見つかり、また、地方領主の文化的側面をうかがわせる木簡など、注目される多くの遺物が出土しました。

④最も歴史の長い製薬会社

漢方薬が、江戸時代以前から家庭常備薬として、あるいは伊勢参りの土産物や道中薬として用いられたといわれます。

地区にある翠松堂製薬は、元亀元（1570）年に製薬業を始めており、現存する製薬会社の中では国内で最も歴史の古い会社となっています。江戸時代には関白二条家の直参調薬所

として免許を受け、宮中をはじめ全国に家庭薬を販売してきました。翠松堂の「百毒下し」は松本良順が処方を伝授したものです。明治 20（1888）年に加藤翠松堂に商号を定め、現在も長年培われた伝統を活かしています。

⑤東海道

東海道が地区の東部を通り、芝田村、赤堀村は四日市宿の助郷として指定されるなど、街道のにぎわいの影響を大きく受けました。現在も街道の往来をうかがうことのできる道標や町家建築が残っています。

⑥戦争遺跡

中世には建立されたとされる誓元寺にある光雲殿（納骨堂）は、昭和 11（1936）年、旧常磐尋常高等小学校に建てられた奉安殿（昭和天皇の御真影と教育勅語を安置）を、終戦直後の昭和 21（1946）年、ここに移築して納骨堂としたものです。終戦後に破壊されなかった数少ない耐火性のある鉄筋コンクリート造の奉安殿として、山門及び鐘楼とともに国登録有形文化財となっています。なお、松本町には、この奉安殿の前の木造の奉安殿も移築されて残されています。

（17）四郷地区

旧四郷村役場

伊藤傳七

伊藤小左衛門

西日野・東日野の大念仏

①近代産業発祥の地

江戸時代まで農村地帯で、醸造業も盛んな地域でした。明治期に入ると、伊藤小左衛門（５世・６世）、伊藤傳七（９世・10 世）の功績により、製糸・紡績・製茶・醸造及びそれら関連産業が盛んになり、三重を代表する経済・文化の栄える村となりました。四日市港の発展とあわせて、本市の近代産業をけん引しました。現在、当時からの建造物が残り、町並みが歴史的景観を形成しています。

５世伊藤小左衛門は法蔵寺本堂を寄進、また、自宅で始めた私塾の笹川学校は、現在の市立四郷小学校です。10 世伊藤傳七（貴族院議員、東洋紡績２代目社長）は、郷土への恩返しにと６万円という大金を寄付し、大正 10（1921）年に四郷村役場が建てられました。現在、地域の歴史を伝える四郷郷土資料館として活用されています。

②中世からの寺社と信仰文化　伊勢安国寺

安国寺は、元弘の変（1331 年）以降の戦死者と後醍醐天皇の冥福を祈願するために、全国に一寺一塔を設けたものです。

伊勢安国寺は、前身寺院西明寺を当てたといわれ、元安国寺の総持庵と伝えられる顕正寺には、西明寺以来安置されていた仏像の一部が残ります。近くにある日野神社には、西明寺の本尊であったとみられる等身大の阿弥陀坐像が伝えられています。また、8 月 13 日には東日野西覚寺から西日野の顕正寺へ、15 日には日野神社から西覚寺を往来する伝統行事の大念仏が行われています。

③農村の暮らしの文化　三大祭

近世までの四郷地区は農村でした。虫送りや獅子舞などの祭礼行事が継承され、また、歴史的な農家建築も現在まで残っています。

県指定有形民俗文化財である大念仏は、鎌倉時代末期から受け継がれてきた仏教的な行事です。虫送りは害虫駆除や五穀豊穣への人々の願いが込められた祭礼行事です。東日野町獅子舞は、春・秋の例祭に五穀豊穣や病魔退散を祈念して神明神社や室生神社、日野神社に奉納されています。

④風致地区と豊かな自然

地区北側の緑豊かな小高い山が風致地区として指定されています。「春の丘」、「夏の広場」、「秋の小径」という散策路が整備され、豊かな四季を感じ取ることができます。風致地区の環境は、地域のボランティアグループにより大切に守られています。

また、四郷地区内では、希少なカスミサンショウウオの生息が見つかっています。カスミサンショウウオは、低地から丘陵地の樹林や竹林などに生息し、水田周辺の水たまりや溝、池沼、湿地など、主に止水で産卵します。

⑤三重軌道からあすなろう鉄道へ

伊藤製糸の工場があった四郷村八王子と市内を結ぶことを目的に、今の四日市あすなろう鉄道八王子線である三重軌道が、大正元（1912）年に開業しました。その支線（鈴鹿支線）として、大正 11（1922）年１月に日永・小古曽間が開業し、同年６月に小古曽駅から内部駅まで延伸され、現在の四日市あすなろう鉄道内部線も開通しました。あすなろう鉄道は、当時の軽便鉄道の線路幅 762 ㎜（ナローゲージ）のまま運行されており、ナローゲージは国内で３路線です。

（18）小山田地区

矢田監物の墓
（小山田つながる MAP より）

大樟（神明社）

マンボ
（小山田つながる MAP より）

①矢田監物と寺社

戦国時代、12 代将軍足利義晴に仕えていた矢田監物は、丹波国からこの地に移り住み、山田城を築城したと伝承されています。天正 18（1590）年の小田原の陣の北条氏との戦いで戦死したといわれています。監物の墓と伝えられる墓碑は、監物の死後に家臣の平尾家子孫により、安性寺裏山墓地に建立したとされます。また、監物が主君義晴の菩提を弔うため長谷山万松寺（現安性寺）を建立したとされ、現在、安性寺に安置されている十一面観音菩薩立像は、市指定有形文化財となっています。

②長い歴史を物語る遺跡や古墳たち

この地域では、旧石器時代から人々が生活していたということを、宮蔵遺跡から知ることができます。縄文時代には、人々が一か所に集住するようになり、縄文時代早期の一色山遺跡からは、炉跡 8 カ所や当時の土器などが発見されています。

古墳時代になると、穴塚古墳群、大塚野古墳群、和田ヶ平古墳群、赤池古墳群など、数多くの古墳が造られます。穴塚 1 号墳は直径 30m の円墳で、市域南部で最大級の規模を誇ります。和田ヶ平古墳群は、足見川と鎌谷川に挟まれた台地上に 7 世紀の円墳が 3 基確認されています。扇状台地の谷間に耕地を求めた古代豪族の家長の墳墓と考えられます。

③農村の暮らしと農業を支える技術

古くから農村地帯として発達しており、粟・稗・小豆・大根などを栽培してきたようです。内部川、鎌谷川、足見川及び天白川が流れる起伏に富んだ丘陵地を活かしたお茶の栽培が盛んで、伊勢茶の生産地でもあります。獅子舞やどんどなどの、家内安全や五穀豊穣を祈る祭礼が現在に引き継がれています。

水にまつわる文化財も多く残されています。六名は内部川の川床より低いため、しばしば水害にあっていたようです。内部川脇の田地の所有について水沢村と堂ヶ山村で争ったことが記録されている「水沢・堂ヶ山野境紛争の判決文書」は市指定有形文化財となっています。マンボなど、灌漑用水の技術も発達しました。

④特色ある自然環境

地区は自然が豊かで、ヒメコウホネなどの花々、ウグイスやキジなどの野鳥、 ホタルなどが身近に見られます。また、田園や茶畑の風景が広がるとともに、起伏に富んだ丘陵地が地区特有の景観を創り出しています。

堂ヶ山町の神明社境内の大樟は、創建当時からの樹齢 800 余年と推定され、市指定天然記念物となっています。

⑤本草学

鎌井松石は、京都で医学と本草学を学んだ後、幕末から明治時代中頃にかけて、西山町で医業を営みながら私塾を開き、教育に努めました。本草学の研究のため山地幽谷を巡って動植物・鉱物を採集、模写し、『三重本草稿』や『三重本草博物地誌』など多くの本を著しました。

丹波修治などと本草学者の集い「交友社」を発足させ、北伊勢地域の本草学者との交流を持ちました。

⑥近代の公共建築物

小山田美術館は、明治 43（1910）年に小山田尋常小学校の旧校舎の一部を移築して村役場として使用されていた木造２階建ての建物です。一部改装して地域で活用され、保存されています。現在、令和 2 年 9 月より閉館しています。

（19）水沢地区

茶畑の風景（「四日市市の地場産業」）

もみじ谷（観光協会 HP より）

お諏訪おどり

①お茶の栽培と人々の暮らし

好適な自然条件を利用した伊勢茶の生産地であり、地域の主要産業となっています。その起源は、平安時代に浄林寺（現在の一乗寺）の僧玄庵が、空海に製茶の教えを受け、唐伝来の茶の木を植えて栽培したのが始まりといわれ、その発祥の地「冠山茶の木原」は市指定史跡となっています。

4 月中旬になると水沢は茶摘みを目前に、特産の「かぶせ茶」の準備がはじまります。かぶせ茶にするためには、収穫する 3 週間から 1 週間前になると茶園の上に黒い覆いを懸けます。覆いをして生産されたお茶は、「おおい茶」と総称されており、抹茶・玉露・かぶせ茶・などが含まれています。水沢は「かぶせ茶」生産日本一です。

一方、水沢は内部川の川底が低いこともあって、水利が悪く、飲み水にも事欠く状況でした。江戸時代前期、当時の庄屋辻久善が水不足の解消のため、内部川上流「瀬戸堰堤」から取水する瀬戸用水を築造し、多くのため池を築いて田畑を潤しました。足見田神社では、辻久善の偉業をたたえる「お諏訪おどり」が奉納され、市指定無形民俗文化財となっています。

②景勝地　もみじ谷

深い緑と変化に富んだ巨岩、そして鈴鹿の峰からの清流が美しい宮妻峡があります。また、もみじ谷は、四日市の紅葉の名所となっています。風光明媚なもみじ谷は、江戸時代、菰野藩領であったときに整備されたもので、昔から文人が数多く訪れ、百人一首で有名な猿丸太夫の「奥山にもみじ踏み分け鳴く鹿の声聞くときぞ秋はかなしき」は、もみじ谷を詠んだものと伝えられています。

③希少動物の棲む自然環境

鈴鹿山脈の鎌ヶ岳、雲母峰のふもと、内部川上流の扇状地に広がる水沢地区は、豊かな自然を有し、カモシカやシデコブシなどの希少動植物が生息しています。シデコブシは、地元の方々の保全活動が続けられています。

④中世の城跡

市域内には中小勢力の武士が割拠し、勢力争いをするなか、加治信濃守が応永 5（1398）

年に水沢城を今の常願寺境内に築城し、この地を治めたとされます。永禄年間の６代加治篠九郎の時、信長に降伏し臣下になったといわれています。

現在、常願時境内の南と西に土塁が残り、堀は本堂の背後西側に灌漑用水路として残っています。

⑤巡見道・巡礼道

巡見道は、江戸時代に、将軍の代替わりごとに諸国の政情・政道の得失などを査察するために派遣される幕府の役人である巡見使の通った道です。現在も道標などが残り、往来の風景を現在に伝えます。

巡礼道は、巡見道にほぼ沿っており、亀山市安坂山町坂本の伊勢巡礼第二十二番の鶏足山野登寺から、菰野町杉谷にある第二十五番引接寺、第二十六番観音寺に行く巡礼たちが通る道と伝えられています。また、江戸時代菰野藩の領地であった水沢町は、もみじ谷へ訪れる歴代藩主も通ったとされます。

4 月中旬になると水沢は茶摘みを目前に、特産の「かぶせ茶」の準備がはじまります。かぶせ茶にするためには、収穫する 3 週間から 1 週間前になると茶園の上に黒い覆いを懸けます。覆いをして生産されたお茶は、「おおい茶」と総称されており、抹茶・玉露・かぶせ茶・などが含まれています。水沢は「かぶせ茶」生産日本一です。

（20）日永地区

日永の追分

日永うちわ（「四日市市の地場産業」）

つんつく踊り

①東海道　間の宿と日永の追分

日永は、四日市宿と石薬師宿の間に立つことから間の宿とよばれ、周辺には多くの旅籠や茶店などが並んでいました。大名行列や参宮客でにぎわい、街道沿いには日永の永餅、うちわ、日永足袋、しらたまなど多くのお店が建ち並んでいました。「日永うちわ」・「永餅」・「日永足袋」は、お伊勢参りの土産物として好評を博し、日永の三大名物と呼ばれました。現在に伝わる日永うちわの製作技術は、市指定無形文化財となっています。

また、日永の追分は、東海道と伊勢街道が分岐する追分として、一日に往来する人の数が多い時で 1 万人に上ったといわれ、多くの人々でにぎわいました。追分の鳥居は、安永 3（1774）年、江戸に店を持つ一志郡川合村（今の久居市内）の渡辺六兵衛が寄付したものが初めで、その後伊勢神宮が遷宮される 20 年毎におおよそ建て替えられています。現在の鳥居は、伊雑宮（伊勢神宮の別宮）の鳥居を用いて、平成 28（2016）年に建替えられたものです。

②景勝地　復活「日永梅林」

登城山にあった日永梅林は、江戸時代後期からの歴史があり、最盛期には 9 千本もの梅花が咲き誇る東海地方有数の景勝地だったといわれています。第二次世界大戦で消滅してしまいましたが、再現を願い、平成 11（1999）年に地元有志により「日永梅林・登城山を復活させる会」が発足し、南部丘陵公園には約 2,500 本に及ぶ梅が植樹されています。

③古墳文化

茶臼山古墳群は、人物・家形・円筒埴輪や、装飾須恵器　台付三連杯などが発掘調査で出土し、地域の有力者の墓とみられます。これら出土品は市指定有形文化財となっています。

④信仰と祭礼行事

農業が盛んな地区であり、輪くぐり神事、つんつく踊り、獅子舞など、暮らしの中の信仰にもとづく祭礼行事が現在まで伝えられています。つんつく踊りの起源は、滝川一益との関連がいわれています。一益の母の隠居所を日永実蓮寺に建築するために地固め工事に歌った歌謡と動作を踊りとしたもの。または、一益が天白川の堤防を築く際に土を固める動作で

踊られたのが始まりといわれており、市指定無形民俗文化財となっています。

⑤戦争遺跡と急速な都市化

1940 年代に塩浜地区の港湾部に建設された第二海軍燃料廠は、空襲を恐れ、昭和 19(1944)年 10 月から日永の丘陵に燃料工場や貯蔵庫などを建設し、疎開しました。現在でもこれら疎開施設ではコンクリートで閉ざされたトンネルが残っていて、戦争の名残を今に伝えています。

また前田町、山崎町にあった海軍燃料廠官舎は、戦後払い下げられたことで住宅開発が進み、主要交通網や鉄道が地区内を通っているという交通利便性もあって、急速な都市化が進みました。

⑥工場地帯（コンビナート）

昭和初期より沿岸部では工場の建設が進められ、昭和 16（1941）年には塩浜地区で第二海軍燃料廠が操業を開始しました。太平洋戦争時の空襲により壊滅状態になりましたが、その跡地を中心に製油所等の工場誘致が進められました。昭和 32（1957）年から 35 年にかけて日本合成ゴム、味の素、松下電工が相次いで建設され、塩浜地区とともに我が国屈指の石油コンビナートが形成され、本市は産業都市として発展しました。

⑦鉄道

大正元（1912）年、四郷村と市内を結ぶことを目的に、現在の四日市あすなろう鉄道である三重軌道の、日永を経由する四日市－八王子間が開通します。大正 11（1922）年には、その支線として日永－内部間が開通し、東海道に沿って地区を南北に縦貫します。

三重軌道のときから軽便鉄道の規格が維持され、今では、平常運行される日本一狭い線路幅（ナローゲージ）の鉄道として知られています。

（21）塩浜地区

磯津の鯨船行事

海山道稲荷神社･狐の嫁入り神事

（海山道稲荷神社 HP より）

コンビナート夜景

（地区まちづくり構想より）

①祭礼行事

磯津町の氏神である塩崎神社の祭礼として、磯津の鯨船行事があります。鯨船が磯津町に導入されたのは大正年間のこととされ、「大正丸」の名称を持ちます。市指定無形民俗文化財となっています。

州崎濱宮神明社の境内社、海山道稲荷神社では節分祭りが行われ、“福豆まき”や“狐の嫁入り道中”では、多くの参拝客でにぎわいます。馳出町獅子舞なども、現在まで祭礼行事が受け継がれています。

②漁業と暮らし

平安時代のころから、伊勢神宮の「御園」として、塩作りをしており、塩作りは江戸時代初期まで行われていました。また、海辺に開けた塩浜村では江戸時代に磯津で漁業が始められ、農漁業を営む村落を形成していました。

③参宮下街道（浜街道）

江戸時代には街道が整備され、東海道より伊勢神宮へつながる参宮下街道といわれた道筋に沿って集落が栄えました。現在、常夜燈や道標が残り、当時の人々の往来の姿を伝えています。

④工業地帯（コンビナート）

昭和初期より沿岸部では工場の建設が進められ、昭和 16（1941）年には第二海軍燃料廠が操業を開始しました。太平洋戦争時の空襲により壊滅状態になりましたが、その跡地を中心に製油所等の工場誘致が進められ、昭和 34（1959）年に第 1 コンビナートが本格的に稼働しました。

昭和 40 年代に入って深刻な公害問題が発生しましたが、現在は環境は改善され、工場夜景など本市の観光資源として発信されています。

⑤鉄道

国内輸送の主力が鉄道であった近代に、工業地帯では貨物輸送の鉄道専用線が整備され

ました。現在では一部のみ存続し多くが廃止となっていますが、現地に残る痕跡が往時をしのばせます。

（22）内部地区

杖衝坂（地区まちづくり構想より）

采女城跡（地区まちづくり構想より）

四日市あすなろう鉄道内部線

（地区まちづくり構想より）

①東海道

内部地区は、江戸時代には亀山藩領、桑名藩領、天領などに分かれて統治されていました。

近世東海道が通り、街道沿いに町並みが形成されました。松尾芭蕉が貞享４（1687）年に江戸から伊賀に帰る途中、街道中屈指の急坂である杖衝坂で落馬した際に「歩行（かち）ならば杖衝坂を落馬かな」と句を詠んだといわれています。宝暦６（1756）年に建てられた句碑が杖衝坂の中ほどにあります。坂の上には茶店が軒を連ねて饅頭を売っていました。『東海道名所記』（浅井了意　万治元(1658)年）には、「杖つき坂　ここに饅頭あり　風味すこぶるよし　杖つき饅頭これなり」と紹介されています。

②記紀神話の舞台

ヤマトタケルが東国を平定し、大和への帰途、病にとりつかれて伊勢国に入りました。采女村あたりまで来たとき、「吾が足は三重の勾（まがり）の如くして甚（いと）疲れたり」と述べて、急坂を杖をついてようやく登りました。それが「三重」の地名の由来となり、その坂を「杖衝坂」といったといわれています。坂の上には、血塚社があり、衰弱した身体で坂の上に辿り着いたヤマトタケルが足下を見ると出血していたので、この場所で血を洗い落として止血したと伝えられています。

采女の地名は、古事記にある「三重の采女」の故事に由来すると伝えられ、采女を献ずることのできる有力な豪族がこの地にいたと思われます。

③古墳文化

内部川沿いには、北小松古墳群、山川古墳群、菅野古墳群、西野古墳群、大垣外古墳群、西起古墳群、五百山古墳群、八幡塚古墳などの多くの古墳が集中し、縄文・弥生人たちが集落を形成し、共同生活を営んでいた、重要な地域であったことがうかがわれます。

④中世の城館　采女城跡

文応元（1260）年、後藤基秀が三重郡采女郷の地頭となって一族郎党とともに移り住み、采女山に采女城を築城いたといわれています。300 年以上にわたり後藤家 15 代の居城でし

た。廃絶については諸説あり、永禄 11（1568）年、織田信長の北伊勢侵攻により戦って滅ぼされた、もしくは元亀３（1572）年、信長により城を追われた、またはその麾下に属したといわれています。采女町の成満寺は後藤家の菩提寺であったと伝わっています。

采女城は独立した９つの郭、高い土塁と深い空堀、虎口等における屈折した形態、櫓台と推定される箇所など保存状況が極めてよく、北勢地方における戦国期の典型的な城館の在り方を示した山城を知る上で一級の史料です。現在、地元の保存会によって一部が緑地として整備され、維持が図られています。

⑤中世の寺院

中世に建立とされる大蓮寺、願誓寺、成満寺、中山寺、上品寺など多くの寺院があります。上品寺の釈迦堂（元文元（1736）年建立）にある釈迦如来坐像は平安時代前期の彫像で、市内木彫最古の作例として、市有形文化財に指定されています。また、中山寺のモッコクは樹齢 300 年を超えるといわれており、市指定天然記念物となっています。発掘調査では、米田山宝鎮寺があったとされる場所から、多量の中世の遺物や木製の鬼板が出土しました。

⑥暮らしと祭礼行事

小許曽神社は、延喜式内神社として神名帳に登載されています。その年の作物の豊凶を占う粥試し（かゆだめし）神事など多くの伝統行事が伝えられ、行われています。

⑦鉄道

近代産業発祥の地である四郷と市内を結ぶことを目的に開業された三重軌道（現四日市あすなろう鉄道）の支線として、大正 11（1922）年に日永－内部間が開通しました。当初は鈴鹿まで延伸される計画であり、工事途中の痕跡が今も残っています。

当時のままナローゲージ（線路幅 762㎜ の狭軌）で運行され、現在では、沿線は住宅地開発が進み、通勤通学など市民の足として利用され、親しまれる存在となっています。

⑧内部川と丘陵の豊かな自然

内部地区は、水沢扇状地の東端で、内部川に鎌谷川と足見川が合流する辺り一帯に位置し、内部川沿いに開けた谷底平野と周辺の台地からなっています。

台地の里山には、東海地方の固有種で東海湖盆との関わりが深いシデコブシや、主に日本海側に分布するタニウツギなどの貴重な植物が、また、ムカシヤンマやハッチョウトンボなどの希少生物が生育する多様性に富んだ自然が残されています。

内部川の豊富な伏流水は、戦時中、海軍燃料廠の工業用水として利用され、戦後は、一帯が水源保護地域に指定されて市民の上水道に供給されるほど、水がきれいです。

（23）河原田地区

みかん山（地区 HP より）

天王祭

忘帰處（地区 HP より）

①伊勢街道

日永の追分で東海道から分かれた伊勢街道が地区の南北を通り、街道沿いに集落が形成され、伊勢神宮を詣でる多くの人の往来がありました。かつては一里塚も置かれ、内部川に架かる河原田橋の常夜燈は、日永の追分から分かれた伊勢街道の一つ目の道しるべであり、現在も道標などが往時の姿を伝えます。

②信仰と祭礼行事

京都祇園祭より伝わった河原田神社天王まつりが江戸時代後期頃から始まり、現在まで伝えられています。牛頭（ごず）天王に疫病の災いを払ってもらおうと祈願する祭りで、青松に紅提灯、ぼんぼりで飾った山車（元は石取祭車）を子供たちが引き、鉦、太鼓を打ち鳴らして町内を練り回ります。また、獅子舞も伝えられています。

大治田の蟹薬師密蔵院は、昔、蟹が土や仏像を運んで築いたと伝えられ、七堂伽藍の大きな寺院であった。蟹のはさみが保存されている。

③古来からの自然災害

古来から内部川、鈴鹿川の水害に苦しめられてきた地区で、特に万治２（1659）年の大洪水により、川尻、川原田、貝塚、内堀の各村が大きな被害を受け、集落を現在地に移動したと伝えられています。明治、大正、昭和の時代に入っても何度か被害を受けていますが、それを乗り越えてきた歴史があります。

④自然や歴史資源

丘陵地東端で河原田神社のある三神山頂上は「忘帰處」と名付けられています。ここから見る眺めは河原田随一の景勝地で、田中光顕伯爵が熊沢市兵衛翁宅を訪れた際に，この地の風景の美しさに見とれて帰ることを忘れたといいます。山上からの眺めは、一望千里に渡り、晴れた日には、知多半島から木曽御岳の山並みも望み見ることができます。

⑤みかん山

地区の西部丘陵地帯は、かつては麓まで海が迫っており、弥生時代後期の八幡、狐穴、中

広、三神山等の遺跡では、発掘調査で竪穴式住居跡が発見されているところもあります。明治 40 年代、丘陵地の斜面に熊沢市兵衛らを中心に静岡のみかん栽培が導入され、河原田みかんが盛んになりました。

（24）楠地区

旧庄屋岡田邸

吉崎海岸

南楠鯨船行事

①楠（くすのき）氏による統治

室町時代前期、正平 12（1358）年、信州より楠十郎正信が来て、本郷の地に楠城を築いたとされます。正平 15（1361）年には、臨済宗妙心寺派の正覚寺が、楠城主の菩提寺として開山されました。楠氏による統治が続きましたが、天正 12（1584）年豊臣秀吉が勢力を伸ばして楠城を攻めた。楠城は落ち、8 代正盛は岐阜に逃げたが、加賀野井の戦いで捕らえられ処刑されました。

②地場産業（ものづくり）

楠地区は、鈴鹿川と伊勢湾に囲まれ、水に恵まれた地形を生かした地場産業が発達してきました。酒造りは 18 世紀から始まり、明治期には生産高も県下随一となり、西に「灘の酒」、東に「楠の焼酎」といわれ、全国に知られるようになります。現在は、宮﨑本店が酒造りを受け継ぎ、宮﨑本店の事務所や貯蔵庫などの建物は国登録有形文化財となっています。

また、海苔の養殖とハマグリの蓄養が盛んです、全国でも有数の出荷高です。

③旧庄屋岡田邸

江戸時代の庄屋であった岡田家の邸宅は、北勢地方に現存する数少ない庄屋屋敷で、木造瓦葺平屋建の主屋と立会所、土蔵も備えており、村を治めてきた旧家の建造物です。市指定有形文化財であり、現在は四日市市楠歴史民俗資料館として活用されています。

④暮らしの信仰、祭礼行事

南楠地区の鯨船行事、北楠地区の神輿渡行事、本郷地区の湯の花神事などが行われます。

南楠の鯨船行事は明治頃より始まったといわれ、北勢地方に分布する陸上での模擬捕鯨行事のひとつです。戦争のため一時期途絶えましたが、昭和 22（1947）年頃復活しました。祭礼の中心は南御見束神社で、鯨船は「龍神丸」と呼ばれており、市指定無形民俗文化財となっています。

また、湯の花神事は、天明 4（1784）年から伝わるとされる伝統行事で、釜番（3 人）

が直径１ｍの大釜に湯を沸し、神職が御幣で湯をかき回し、御幣を上げるとたぎり立つ湯の花が飛び散り、その模様によって五穀豊穣を占う行事です。

⑤砂浜の自然－吉崎海岸－

楠町は自然豊かな地区で、鈴鹿川派川河口や吉崎海岸付近は、海浜植物や野鳥の宝庫です。伊勢湾に面する吉崎海岸は、本市唯一の砂浜のある海岸で、アカウミガメの産卵が見られ、三重県の県鳥で絶滅が危惧されているシロチドリの営巣地としても貴重な場所です。また地区内の水路にはカニなどの水生生物も生息しており、本郷地区では、鈴鹿川堤防沿いの水路でホタルが舞う姿も見られます。

環境を守るために、吉崎海岸の除草・清掃活動やホタル保護のためのカワニナの放流、サクラの植栽などに取り組んでいます。